

ペテロの手紙第二

第一の手紙と同じ複数の教会に宛てられたもので
ペテロが書いた場所も同じローマだったようです
彼は自分の死が迫っていることを知っていました
伝承によれば皇帝ネロの時代にローマによって殺されたようです
そのためこの書はペテロのお別れの手紙とも言えます
彼はその冒頭でイエスを信じる者は
決して成長を止めてはならないと励ましています
次にそのころ増えてきていた偽教師たちが
手紙の受取人である教会のクリスチャンたちを
惑わしていることについて2つの警告をしています
まずは偽教師たちの墮落した生き方によって
次にねじ曲がった神学によって惑わしているのです
この手紙全体を通してペテロは
彼やほかの使徒たちに対する偽教師たちの非難に反論しています
彼がこの手紙を書いた目的は
信徒たちからの信頼と教会の秩序を取り戻すことでした
ペテロはまず冒頭で彼らがイエスを通して
神の性質にあずかる者として招かれていると述べています
これは神の永遠のいのちと愛を分かち合うという驚くべき特権で
それに対して人は生涯をかけて応えるべきです
この恵みを受け取るためには
神の聖なる性質を表す特性を全力で培うことが必要です
ペテロはそのために求めるべき7つの性質を挙げていますが
最後のものは他の6つを網羅する完全なもので
それは愛です
イエスによれば愛とは相手が応えてくれようがくれまいが
どんな犠牲を払おうが相手のために自分をささげることです
ペテロによればそれは神ご自身のいのちにあずかることです
ペテロは次にこの手紙の目的を述べています
それは後の世代に彼の教えを伝えることです
というのも彼の死は迫っていて直接教えることがもうできないからです
だから死ぬ前にイエスや使徒たちの教えをゆがめた
偽教師たちによる異論や非難について
ちゃんと伝えておきたかったのです
ペテロは
その時も後の時代にも存在する懐疑論者の主張
すなわちイエスは死からよみがえった王だというのは
ペテロやほかの使徒たちのでっちあげで
イエスの再臨などないという言い分を取り上げます
そこでペテロは
自分の目でイエスが山の上で変貌したのを見たと言っています
これはマルコ9章に書かれていることです
使徒たちはイエスが王として高く上げられるのを目撃しています
しイエスのよみがえりはイエスが王として今も生きていて
いつの日かこの世界を救うために戻ってこられることを意味しています
この神の王国をもたらすイエスの再臨は

旧約聖書のすべてが指し示していることの成就なのです
旧約聖書の預言者たちのことばは
彼らがでっちあげたファンタジーなどではありません
むしろ聖書に書かれた人間の言葉と人となられたイエスを通して
神ご自身が私たちに語りかけている言葉なのです
ペテロはそれから偽教師たちの脅威について語り
彼らの異なった教えに焦点を当てています
この偽教師たちは神が最後の裁きの日に
すべての人に選択の責任を問うという教えを否定しています
これを否定しておけばお金とセックスについての
イエスの教えを都合よく無視できたのです
というのも彼らは教会で教えることによってさんざん金儲けをし
あちこちで性的関係をもっていたからです
しかしペテロは神は必ずその反逆に対して裁きを下すと断言します
そして神がそのようにされた3つの例を挙げました
一つめは創世記6章の神の子たちのストーリーで
これは当時ユダヤ人の間でよく読まれていた
第一エノク書という書の中で解説されていました
この書によれば神の子たちは神に反逆し
女性たちと性的関係をもって神の裁きを身に招いた御使いたちです
次にペテロは
旧約時代の洪水の話とソドムとゴモラの話を引き合いに出しています
どちらの話にも神に反逆して裁かれた人々が出てきます
ペテロは
しかし神はいつも誠実にご自分の民を救い出されたと言って
ロトの話为例に挙げています
そしてこれらの話を
墮落した教師たちの生き方と関連させています
どちらも金銭とセックスを追い求め神の権威を軽んじた他の人々にも
神は道徳的な価値観など問題にしていなと思わせようとしています
彼らはクリスチャンの自由を説きながら
それを自分のしたいことをなんでもする口実にしていると
ペテロは言っています
そして次の3章でパウロの手紙について述べています
というのも偽教師たちはキリストにある自由についての
パウロのメッセージを曲解し
パウロが言ったのとはまったく違う自由を説いていたからです
この教師たちは本当の意味で自由ではなく
肉欲の奴隷だったことをペテロはあばいています
彼らがクリスチャンであるという事実は事態をさらに悲劇的にしています
イエスの教えを知っていた彼らは二重に責任を問われるからです
彼らは箴言にある犬は吐いたものに戻る
豚は身を洗っても泥の中を転がるというたとえの
哀れな例になってしまったのです
ペテロはさらに
最後の裁きを否定する偽教師たちの主張について触れています
彼らは神の民は何代にもわたって約束されたことが

成就するのを見ないまま今に至っている
イエスの再臨など起こらないと言っています
ペテロはその言い分が非常に短絡的であると指摘しています
私たちが住んでいるこの驚くべき世界を見なさい
私たちが今存在しているということは
過去のある時点で神の言葉が無から有を生みだし
混沌とした世界に秩序を与えるために
劇的な介入をしたことを意味しているのだ
神はまたもう一度同じことができるとペテロは言います
そうなると問題は
神はなぜそれをもっと早くそうしないのかということになりますが
ペテロは時間に関する人間の感覚には限界があると指摘します
神がみわざを行われるあまりにも長い時間の流れは
人間の短い一生の枠にはおさまりきらないのです
この途方もなく長い時間は神の忍耐のしるしでもあります
というのも各時代の人々に自分の自己中心性に気づき
憐れみ深い神の前にへりくだるチャンスが与えられているからです
しかし神の恵みは必ず主の日をもたらすのです
ペテロはここで神の裁きが下る日を焼き尽くす炎として描いている
イザヤ書とゼパニヤ書の預言的な詩を引用しています
天は燃え崩れストイケイアは溶け去ると言っています
これはギリシャ語で要素と理解することができ
その場合宇宙の物質が溶解していく事を指しているかもしれません
あるいは天体つまり星を指しているかもしれません
ペテロが引用したイザヤ書 34 章ではそう使われていました
この場合その箇所は
すべてをご覧になる神の前で天が巻き去られることの隠喩と考えられます
だからペテロは主の日には
地とそこに満ちるものがすべて明るみに出ると言ったのです
神の焼き尽くすような裁きの真の目的は
宇宙の物質を解体することではなく
悪と不正を明るみに出し取り除き新しい天と地を創造することなのです
そこは神の正義と愛と
神と隣人を自分のように愛する人で満ち溢れているのです
ペテロはこれこそクリスチャンの真の希望であり
イエスとパウロを含む使徒たちが告げ知らせてきたことだと結論付けています
パウロの手紙を文脈を無視して読むと誤解が生じるのですが
使徒たちはみな同じ見解をもっていると言っています
こうしてペテロは教会への最後の手紙を終えます
第二ペテロには緊迫感が漂っていますが
それは神はこの世界を愛し
イエスを通して必ず救ってくださるという確信に基づく
ペテロの情熱から来ているのです
神の愛は神が愛する世界を台無しにしてしまった罪と不正に対決し
それを滅ぼし御心にかなった時に
人間と宇宙全体のために新しい未来の扉を開くのです
この書は世界全体を包む壮大なビジョンを語り

私たちに自分の毎日の生活を吟味するように迫ります
これがペテロの手紙第二です

【要約】

第二ペテロは、ペテロによって書かれた手紙で、ペテロの死期が迫っている時に書かれたと言われています。ペテロは信者たちにイエスを信じる成長を止めず、神の性質にあずかる者として生きるよう励ましました。また、偽教師たちの墮落と誤った教義について警告し、信仰を守る必要性を強調しました。ペテロは信者たちに神の性格を反映する7つの美德を育むよう勧めました。そして、偽教師たちの非難に対抗し、自身の死が近づいているため、信仰の純粹性を保ち、後の世代にイエスの教えを伝えるためにこの手紙を書いたことを説明しました。ペテロは偽教師たちの反キリスト的な教義を批判し、主の再臨についての信仰を強調しました。最後に、神の裁きが善と悪を明らかにし、新しい天と新しい地をもたらす目的であることを示しました。この手紙は、信仰の確固たる基盤と神の愛に基づく希望に焦点を当てています。